牧草と園藝

10

秋に思う

阿蘇の山里秋ふけて……と孝女白菊の歌に子供心を強くうたれてから、秋の阿蘇山麓を歩いてみたいと思うようになつた。またトーキビの増殖改良に苦労した私のデントコーン時代から南方型トーキビの産地阿蘇山麓の稔りの秋を訪ねてみたいと思うようになつた。しかし雑用に追われて未だ一度も秋の九州に旅したことはない。

過ぐる夏の大水害で熊本市中を阿蘇の火山灰で埋めつくし、あたかも新潟の雪景色のごとくになつたと聞いて、阿蘇山系一帯の牧野改良と飼料木の重要性を考えるようになつた。毎日トゲナシアカシヤやイタチハギの類、サブタレニアンクロバー、フェスキュウ類のごとき瘠地に強い草木の増殖をしている身には、阿蘇の山肌全部をこれらの類で包んでやりたい。そして豪雨が見舞つても火山灰の流出を防いでしまう、またさらに秋晴れの沃野に水害なんぞはどこの国のことかとの面持ちで、彼方此方に家畜が群居する阿蘇の山里を夢みている。

× × ×

今朝、鳥取県の知友から二十世紀の名梨一荷を発送したとのハガキを受けた。この夏の豪雨にも負けずに、粒々辛苦、立派に成熟した逸品を、食べる前に、皮が薄く滑かで、果肉が透けて見えるようなあの感触を、両の掌にだいて愛でたいものである。

また想うことは、鳥取県下二十世紀の梨園一帯は、山を拓いた傾斜地で耕土が流れ易い。この春三月山陰線を旅したとき、赤褐色の地肌が見えるのはほとんど梨畑で、砂浜の老松のごとく根元が洗われて根張が浮き出ているのを眺め、寒々とした感じを起し、この地に秋十月、暖地型の牧草クリムソンクロバー、イタリアンライグラス等を蒔き、秋から春にかけて地肌を包み、五月早々の花どきに刈取つたら、豊富な飼料と緑肥がとれ、土壌流亡も防げるし、果樹園と小家畜の組合わせもできて、二十世紀の果形もまた一まわり大きくなるであろう、と考えておつた。

× × ×

今年は九州の水害から始まり、北海道の冷害まで、災害の多い年であつた。札幌の米の値段も百二十円ぐらいから急に二百円ぐらいまで上つたという。もつと上るかも知れない。凶作の米は不味くて高値だというのだからやりきれない。黄金の秋というが、概して北海道の稔りの色はあわただしくて、美しさに乏しいこの秋の田面は一入冴えない。

二、三年前に常盤線を上る朝明けに、稲の稔りの色を静かに観賞したことがあつた。色調などに鈍感、無頓着というよりも盲に属するかも知れぬ私であるが、二、三時間の車窓のうつりかわりで、汽車が南進するにつれ、みどりから鶯餅の色になり、枇杷色になり、黄金色の田面に利鎌が光るまでの変化を眺め、あれは粳米だなこれは糯米らしいぞ、と非常に興味深く感じ、北海道でもこんなにゆつくり稔る天恵があればもつと美味しい米がとれるのにと羨しく思つた。丁度空腹時に朝露に色さえた米の成る木を見て食慾を感じたせいかも知れぬが……。

北海道の米作りは融雪早々から土を耕し、初雪を見ながら稲披き籾摺りをするのだから全く忙しい。水田緑肥が作られないのも無理はないが、品種改良が進み、温床育苗が普く行われ、凶作でも往年のごとき惨めさがなくなつたことは有難い。このように研究改善は限りなく進むのだから、北海道の早稲の田圃に暖地のレンゲに替る水田緑肥の栽培がたしかにできるようになることを信じて、緑肥作物の探究をしたいものである。

（五十嵐　清）

牧草と園藝　十月號

目　次

◇表紙写眞……果実色づく。余市りんご園にて
◇秋に思う……五十嵐　清
◆トゲナシニセアカシヤ…雪印種苗株式会社…一
◆球根ベゴニアの栽培……石田文三郎…三
◆果樹害虫に対する新殺虫剤
パラチオンの効果について…川村英五郎…四
◆暖地の冬季飼料に有望な
飼料根菜の種類……岩崎徳海…六
◆早春の緑飼に適するレープ（菜種）の栽培…八
◆芝生として有望なチューイングフェスク……八
◇果樹苗木案内……九